
悪魔の妹ウル

アバドン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の妹ウル

【Nコード】

N6238Y

【作者名】

アバドン

【あらすじ】

2011年の現代、高校1年生の悩める少女がいた。少女は勉強ができ、運動神経もよいことから、まわりの人間に期待され、尊敬されている。しかし、家に帰れば両親は仕事でおらず、いつも独りでの夜食。そんな生活を送っていると、ストレスも溜まり、自殺を考えるようになる。

そんなある日、クラスメイトから『悪魔の館』という都市伝説を聞く。その悪魔は妹を求めており、思春期の自殺などを考えている少女だけが悪魔に出会える。少女はその日の帰り、悪魔と出会って

しまい、妹になる事を決める。それが今以上に過酷な人生の始まりになるとも知らずに。

登場人物紹介（前書き）

それほど長い旅ではなかったです。アバドンが帰ってきました。待っていない人もいるでしょうが、小説の腕を磨いてきたつもりです。ミソログアよりもたぶん面白いはずで。誤字脱字も少ないはずで

登場人物紹介

名前：ティアマテウス（通称ティア）
種族：悪魔
年齢：24歳
身長：180cm
体重：75kg
武器：バルムンク
髪の色：黒色
瞳の色：右は黄色 左は青色（悪魔化すると両方赤色になる）

この物語の主人公で、性格の悪い悪魔族の生き残り。父の遺してくれた『バルムンク』と共に、父の仇を討つべく力を蓄えている。悪魔は人間形態と悪魔形態に別れている。人間形態では、姿は人間そのものだが、悪魔形態では形は人間でも、姿は化け物のようになるのだ。

悪魔である父・ディアヴォロスと母・ルシアの間に生まれ、兄・ヴェテルギウスと妹がいた。父と母と妹は戦いで命を落とし、兄は行方不明。

名前：ウルティミウス（通称ウル）
種族：悪魔
年齢：16歳
身長：160cm
体重：50kg
武器：金剛宝剣
髪の色：青色

瞳の色：水色

この物語のヒロイン。紺色の制服を着ていて、天道高校に通う勉強ができて運動神経も抜群という。高校ではアイドル的な存在で、テレビの取材も来るくらいだ。現実から逃げたくて、ティアの妹となり、悪魔として生きる道を決めた。

ティアの真の目的を知らず、ただ兄となったティアについて行くだけの日々を送るようになった。

その他の主な登場人物

名前：十六夜 零時いざよい れいじ

種族：死神

年齢：21歳

身長：175cm

体重：70kg

武器：幻魔氷剣げんまひょうけん

髪の色：銀色

瞳の色：青色

ティアを狙う死神の一族。悪魔も人間も嫌いだが、理由も無く殺すということはない。植物や小動物を愛している。

10年前の戦いの生き残り。零時は、ティアに関係する人物を戦いで殺し、手柄を立てている。

名前：秋月 紅葉あきつき もみじ

種族：死神

年齢：14歳
身長：155cm
体重：45kg
武器：炎龍刀えんりゅうとう
髪の色：赤色
瞳の色：橙色

零時の部下で、命ある者から命を奪うのが大好きな少女。可愛い外見とは裏腹に、殺戮を繰り返している。
10年前の戦いには参加していない。

名前：浅沼あさぬま紫苑しおん
種族：死神
年齢：19歳
身長：170cm
体重：55kg
武器：雷龍刀らいりゅうとう
髪の色：紫色
瞳の色：緑色

紅葉と同じく零時の部下。紅葉とは違い、理由もなく他人を傷つけたりはしない。零時の命令は絶対と思っている。
10年前の戦いには参加していない。

名前：ヴェテルギウス（通称ヴェル）
種族：悪魔

年齢：24歳
身長：180cm
体重：75kg
武器：アロンドイト
髪の色：黒色
瞳の色：赤色

ティアの双子の兄。訳あって、孤立している。死神にもティアにも、生きている事は確認されてはいない。

名前：ラ・モール・ファントム（通称ラ・モール）
種族：死神
年齢：51歳
身長：170cm
体重：65kg
武器：煉獄の魔剣れんごく まげん
髪の色：白色
瞳の色：紫色

ティアの父を殺した死神一族の王。ティアがいつか自分と同等の力を持つのを待っている。かなりの力を持っており、その力は、その気になれば町1つ破壊できるほどの力を持っている。

強い者との戦闘を好むだけあって、今のティアには敵として認識していない。故にティアと戦う気は今のところ全くない。

オリキャラ投稿について

名 前：
種 族：
年 齢：
身 長：
体 重：
武 器：
髪 の 色：
瞳 の 色：

それと、服装や、口調などを書いてくれるとありがたいです。

主人公を圧倒したり、世界観を崩すようなオリキャラは採用しません。

種族は何でもいいです。人間でも天使でもナメツク星人でもいいです。

登場人物紹介（後書き）

オリキャラを募集しています。兄のような文章力はありませんが、これから良くしていきます。

序章（前書き）

どうも、アバドンです。旅から早くも帰ってきました。

序章

2001年12月31日。ここはフランスの都パリ。凱旋門の屋上で、2人の人物が幾多もの戦いを勝ち残り、最後の決着をしようとしている。1人は白髪の短髪で、ボロボロの黒いライダーズーツに、赤いコートを着ており、右手には青色に輝く剣しるぎを持っている。そしてもう1人は、赤黒い鎧を纏い、その胸と膝の部分には、ギョロギョロ辺りを見回す血のように不気味な赤色をした目玉がついている。そして右手には、緑色の不気味な邪気を放つ巨大な大剣を持っている。

「今……長きに亘り……続けられてきたこの戦いに、決着をつける時が……ぶは！」

赤いコートを着た男が口を開いたが、最後まで喋る前に血反吐を吐き、その場に座り込んでしまった。

「貴様ら悪魔もこれで終わりだ。この戦いは我が死神一族の勝利に終わるようだ」

鎧の男が、その大剣を構えてゆっくりコートの男に忍び寄ってくる。

「くっ……こんな所で、負ける……わけには……！」

全身に力を入れ立ち上がろうとするが、かなりの出血に疲労が重なり目眩がして、うまく立ち上がる事ができない。

「諦めるのだ。貴様ら悪魔一族はもう……」

一步、また一步と近づいてくる。そしてコートの男まで、あと数歩まで迫って来たそのとき。

「悪魔は……まだ終わらぬ！ ハアア！」

「何を！？」

コートの男は最後の力を振り絞り、その手に持っていた剣を凱旋門から投げ落とした。

「息子よ！！ その剣を持ち、いつか悪魔一族を蘇らせる！ これ

は命令だ！ 放棄することは絶対に許さん！！」

投げ飛された剣は、凱旋門の下コンクリートに突き刺さった。

「まさか、自らの命と同等に扱ってきたあの剣を、息子に託すとは……死を覚悟したのだな……ディアヴオロスよ」

「ああ……私は駄目でも、息子がやってくれるさ」

「フン。まあよい。その息子だけは生かしといてやる」

鎧の男はその大剣を高々と振り上げ、全身の力を込めて振り下ろした。

「いつか思い知るだろう……ラ・モールよ……」

そしてコートの男の身体は縦に斬り裂かれ、1つだったはずの身体が2つになった。悲鳴を上げる暇もなく、コートの男はこの世を去った。

「フ……フフ……フハハハハハハハ！！」

鎧の男は戦いに勝利したことで喜びに満ち溢れていた。その高笑いと同時に、パリの都は、新しい年を迎えた。

それと同じ頃、凱旋門の下では、1人の少年が落ちてきた剣を手に取り口を開いた。

「父上の命令……確かに聞きました。命令を達成するまで、自分はこの剣と共に、この先の人生を歩んでいきます」

そう言つと、少年は背中に剣を装着し、凱旋門に背を向けその場から立ち去った。

序章（後書き）

オリキャラ募集中です。どんどん評価してください。

第1夜「闇の世界」(前書き)

第1夜を投稿します。

第1夜「闇の世界」

2011年10月1日。東京都渋谷区。その町にある天道高校に、1人の少女が通っていた。その少女の名を、クラスメイトや教員は、『神埼 楓^{かんざき ふう}』と呼んでいる。楓は今年の8月15日に16歳になったばかりの高校1年生だ。顔立ちもよく、成績を良いことから、男子だけでなく、女子からも高い評価を受けている。テストでは常に上位にいる。中学の頃は陸上部に所属し、走り高跳びで好成績をこのしてることから、教師からも期待させている。だが、それがストレスとなる事もよくある。

家庭では、両親は夜遅くまで仕事で帰宅してこないため、夜食は毎日1人だけで食べている。そんな神埼には兄妹もいないので、中学の頃から兄妹……なるべく頼りになるような兄が欲しいと願うようになった。

そんな生活が、いつまで続くのか。別に自殺するしたい苦しいというわけではない。ただ、期待されることからくるストレス。家での孤独。それが、いつしか耐えられなくなったときに、ある噂を耳にした。

「ねえ楓！ 『悪魔の館』 って知ってる！？」

授業後に1年D組の教室で、楓を含めて3人で話しているときに、1人の茶髪のクラスメイトが唐突に話しを持ちだしてきた。

「悪魔の館？」

楓は初めて聞くその言葉に、首を傾げる。

「ああ知ってる！ 何か悩みを持った思春期の女の子だけがたどり着ける所だよね！」

そしてもう1人の金髪のクラスメイトが興味のある話なのか、飛び跳ねながら答える。

「それって、何かの映画？」

まあ映画のような感じではあるかもしれない。

「違うよ楓！ 『悪魔の館』っていう都市伝説があるの！」

そして茶髪のクラスメイトは、ゆっくりと怖い話でもするかのように話し始めた。

「それはね、ある悩みを持った思春期の女の子が、町をフラフラしている、いつの間にか知らない場所にたどり着くんだった。そしてその目の前には黒い館があって、その中に入ると悪魔がいるんだって。そしてその悪魔はその人の過去や悩み事を言い当てると、いくつかの質問を繰り返した後、最後にこう聞いてくるんだって……」

茶髪のクラスメイトは口を閉じた。

「……………『悪魔の妹になる気はないか』……………って」

そして金髪のクラスメイトがその質問をする。

「そしてその質問に『はい』と答えると、その人はその悪魔の妹になって、闇の世界へ連れて行かれるんだって！」

茶髪のクラスメイトは話を再開する。

「怖い！」

金髪のクラスメイトは震えながら楓の側に寄る。

「何で女の子だけのの？ どうして妹なの？」

「さあ。ただのロリコン悪魔じゃないの？ ぶっちゃけ、アタシだってその都市伝説、そこまで信じてないんだよね」

「アタシも。実際に見たって子は何人もいるみたいだけど、ホントかどうかねえ」

2人のクラスメイトは、話を盛り上げるだけ盛り上げて、最後には下げてしまった。結局何が言いたかったのか、楓にはよく分かっていなかった。

「ま、楓には悩むようなことなんてないと思うから安心だよな？ じゃね！」

「そうそう。何せ天才少女！ だもんね！ バイバイ！」

最後にそれだけ言うと、2人は教室を出ていった。

（私だって、悩みの1つや2つくらい……。いつその事、その悪魔

の妹になっちゃおうかな……)

そんな事を思いながら、楓もそろそろ帰宅することにした。

今の季節は衣替えて忙しい。まわりの人々は徐々に長袖の服や長ズボンを履く人が増えてきた。楓の通っている高校でも、今は夏服か冬服のどちらでも着て登校して来てもよい期間の最中だ。楓はまだ夏服のままだ。もう少しだけ寒くなったら着るつもりでいる。

(はぁ……また家に帰ったら独りなのよね。お父さんもお母さんも、仕事が忙しいのは分かるけど、それでも少しくらい私と一緒に時間を過ごしたって……)

楓は寂しそうな表情を見せながら、夕方の町を歩いている。はずだった……。

「……………え？ こ、ここ……………どこ？」

気がつくと、さっきまではまわりに人などいくらでもいたはずなのに、気がつくと、辺りはもうすでに暗闇に包まれており、人の気配など全くなかった。

「どうということ？ これって……………まさか」

『それはね、ある悩みを持った思春期の女の子が、町をフラフラしている、いつの間にか知らない場所にたどり着くんだって』

楓はさっき教室で聞いた都市伝説を思い出した。

(まさか……………そんな！ こんな事が、本当に起きるなんて！)

楓は一瞬目を疑ったが、確かに自分の目の前には話しの通り、洋風な黒い館が、堂々と聳え建っていた。

「夢よ。夢に決まってる。きっと疲れてるのよ。だからこんな夢を

……………」

そして黒い館は、入れと言わんばかりに、まるで意思を持っているかのようにその重そうな鉄の扉が開いた。

「……………」

楓はしばらくどうするか考えたが、帰宅するにしてもどうやってここから戻ればいいのか分からないので、とりあえず噂が本当ならば危険はないはずだと、館の中へとまるで誰かに心を操れているかのように、ほとんど自分の意思とは関係なしに足が動き、館へと入って行った。

中は蠟燭ろうそくが数本あるだけあり、その明りだけを頼りに前へと進んで行く。そしてずっと進んで行くと、目の前には黒い机がと黒い椅子があり、黒い衣服を身にまとった男が椅子に座り、机に足を掛けて座っていた。

「え、えつと……あの……」

「——嫌なのだろう？」

「え？」

少々突然の出来事に戸惑っていた楓に向かって、黒服の男は突然口を動かした。

「まわりに期待されるのが嫌なのだろう？ 昔から期待され続け、それがストレスにもなって疲れ果てている。家に帰れば独りで、構ってくれる家族や、悩みを打ち明けれる友人もいない。そんな孤独な人生に、疲れ果てているのだろう？」

黒服の男は、まるで楓の心を読んでいるかのように楓の本心を言い当てた。

「……そ、そうなんです。お願いします！ 私を……私を助けてください！」

楓は黒服の男に泣きつくようにお願いした。

「……闇は好きか？」

「え？」

「夜は好きか？ 黒は好きか？」

突然黒服の男はいくつもの質問をしてきた。

「え、えつと……や、闇より、光の方が好きです。光の方が、『希望』って感じがしていいです。夜は星や月が綺麗なので、好きな方です。黒より、私は青色が好きです。空が、綺麗な青色をしている

ので」

楓は黒服の突然の質問に、順序よく答えていく。

「……そうか。ならば最後に問おう………悪魔の妹になる気はないか(……)？」

噂通りの質問をしてきた。これで『はい』と答えれば、その者は悪魔にされ、永遠に闇の世界で生きる事になる。

しかしここで『はい』と答えてしまえば、この苦しい生活から抜け出せる。どうせ学校では、心から慕う親友もいない。家に戻ったとしても独りぼっちで、そんな生活が続くぐらいなら、いつそのこと……。

「あなたの……妹になります！」

「……フン。では、この契約書にサインを」

そう言つて、黒服の男はA4サイズの紙と、万年筆を楓に差し出した。楓は黙つてその用紙に自分の名前を記入した。

「書きました」

「……『神崎楓』……か。下らん名だな。喰つてやる」

黒服の男はスウッと空気を吸い込むと、さっき書いた楓の名前が用紙から剥がれ、口の中へと吸い込まれていった。

「契約完了。これでお前は名無しだ。嘘だと思つなら自分の名を言つてみる」

「わ、私の名前は……あれ？」

どういう事だろうか。自分の名前など何よりも先に頭に浮かぶはずなのに、全く浮かんでこない。

「ど、どうして？ 私の名前は……名前は……名前は……！」

「お前の名はウル……ウルティミウスだ」

「ウル……ティミウス？」

「そうだ。名を思い出せないのはオレがお前の名を喰つたからだ。もうお前の前の名はこの世には存在しない。もう2度と思いだす事はないだろう」

そう言いながら黒服の男はあるものを机の下から取り出した。

「それは、何ですか？」

「悪魔の血だ。契約を完了したお前にはまず、悪魔になってもらう」
このとき、悪魔になるという噂は本当だと確信した。そして黒服の男は、瓶に入った血をグラスに注ぎ、机に置いた。

「飲め、と言うことですか？」

「そうだ」

「……………」

多少のためらいはあったが、契約してしまったものは仕方がないので、香りをかいでから、少しずつ喉に通した。味はこれこそが『血』というものだと感じさせるように、濃く、不思議と美味だった。
「飲みました」

「これでお前も悪魔の仲間入りだ。これから遠慮なしにオレの事は『お兄ちゃん』とでも呼ぶがいい。我が妹ウルティミウスよ」

黒服の男はゆっくりと右手を差し出した

「名前を聞いてもいいですか？」

「ティア…………ティアマテウスだ」

「ティアマテウス……………よろしくね、ティアお兄ちゃん」

こうして人間・神崎楓は悪魔・ティアマテウスの妹になった。

第1夜「闇の世界」(後書き)

オリキャラ募集中です。

第2夜「三種の神器」(前書き)

早くも2話目を投稿します。

この話はほとんどティアとウルの会話で物語が進んでいきます。

第2夜「三種の神器」

悪魔の契約書にサインをした神崎楓は、自分の本当の名をティアマテウス（通称ティア）と言う悪魔に喰われ、ウルティミウス（通称ウル）と言う名を与えられた。ティアの妹になったウルは、多少だが正気に戻り、何故こんな事をしているのかと、ティアに尋ねた。

「何故そんな事を聞く？」

質問を質問で返された。

「何故って……気になったから……かな？」

気になる事は聞くのが普通だ。

「まあいい。可愛い妹の問いだ……答えてやろう。何故オレがこんな事をしているのか、何故思春期の女だけなのか」

ティアは、まずこんな事をしている理由を語り出した。

「オレは察しの通り悪魔だ。悪魔一族の生き残りだ」

「生き残り？　じゃあ、お兄ちゃん以外に、もう悪魔はいなの？」

「そうだ。オレたち悪魔はかつて『死神』と言う一族と何代にも亘り戦いを繰り返してきた。その戦いが今から10年前の2001年に幕を閉じた。その最後の大将同士の戦いで、オレの親父は敗れ、戦いは死神の勝利で終わった」

語り続けているうちに、ティアは少しずつ悲しそうな表情を見せってきた。

「しかし親父は最後の力を振り絞って、オレに悪魔一族の未来を託してくれた。その証が、この魔剣『バルムンク』だ」

そう言って、ティアは後ろの額縁に飾ってあった青く美しい光を放つバルムンクと呼ばれる魔剣を手にとり、ウルに見せた。

「バルムンクは圧倒的な魔力を持つ悪魔にしか扱う事はできない。それがオレの親父だけだった。しかし敗れた！　こいつの力を持っ
てしても、奴を斃すことはできなかった！」

次第に怒りが込み上げてきたのか、声に怒りの感情が混ざってき

た。

「戦いは死神の勝利に終わったが、オレは誓った。必ずや親父の仇を討つ……と。そのためには戦力がある。オレ1人ではどう足掻い^{あが}たって奴らには勝てない」

「だから、思春期の悩みを持った女の子たちを？」

「そうだ。悩みを持った若き者なら、何の未練も無く、悪魔となつてくれるだろうと思つたからな」

「そうなんだ……でも何で女の子だけなの？　しかも妹なんて。戦力が欲しいなら、男の子の方が頼りになるんじゃないの？」

それはそうだ。何故わざわざ力の弱い女を味方につけるのか。男の方が力が強く、絶対的な戦力になるに決まっているではないか。

「理由ならあるぞ。1つは、あいつ（・・・）……いや、今人間界つて妹ブームだろ？　だから妹がいいかなって思つてさ」

「え？」

あまりに呆気ない理由に、ウルは固まる。

「それと、人間界のテレビなんか見てると、女は母性本能が働いて、自分の子を命懸けで守ったり、時には浮気した夫に対して、天使から悪魔に変わったりするだろう？　だから下手に男を味方につけるより、女の方が多少力は弱いけど、勇気がある。自分だけ助かるような真似をする奴は少ないと思つてな」

確かにそうだ。最近のテレビでは、『怖い女』とか『強い女』なんてタイトルをつけて、放送しているテレビ局もある。逆に、『怖い男』『強い男』なんてタイトルのものはほとんどない。強い男は、いるにはいるのだが、大した悩みを持っていない奴が多い。ほとんどの確率で男は変態でヘタレだ。

これはあくまでティアが調べた結果だ。全員がヘタレで変態で、悩みを持っていない幸せな奴とは言っていない。

だが、ティアは本当にそんな理由で『妹』を求めているのだろうか。ウルは何か引つかかっていた。

「そんな奴らよりか、いい女を味方につけた方がいいだろ？　それ

に……………」

と、言いかけたが。

「それで、何？」

「いや、何でもなし。これでオレの事は大体話したな。ああ、言い忘れていたが、もう家に帰っても学校に行っても、誰もお前の事は覚えていないからな」

「はい…………え？ それってどういう事！？」

ティアの衝撃的な一言に、ウルは思わず椅子から立ち上がり、机をバンツ、と叩く。

「お前の前の名はオレが喰っちまったんだ。喰われた名の人物は、もうこの世には存在しねえ。永遠に…………死ぬまで闇の世界の住人として生きなければならぬ」

「そんな…………」

「今の生活が嫌でサインしたんだろ？ それなのに、今までの生活が送れないって分かれると、契約を破棄するのか？」

「そ、それは…………」

ウルの目には少し涙が滲み出ている。

「安心しろ。別にお前の関係者を殺したわけじゃない。リセットしただけだ。また関係を築きたければ好きにしろ」

自分の目的のために他人を道具のように扱うこの男は、まさに悪魔だ。しかしそれには、ちゃんとした理由があるからだった。

「オレはただ妹が欲しくてお前を悪魔にしたわけじゃない。ちゃんとした目的ならある。それがまず、三種の神器を集める事だ」

「テレビ・洗濯機・冷蔵庫…………？」

「そっちじゃねえ。『やたのかがみ八咫鏡・やさかにのまがたま八尺瓊勾玉・あめのむすくものつゐ天叢雲剣』だ。そんな

物集めてどうするんだ？」

間違った名前を言ったウルに、ティアは訂正した。

「え。違うの？」

当たり前だが違う。今頃そんな物集めてどうしようというのだ。

「で、それはどこにあるの？」

「ああ……それが分らないんだよなあ。昔は悪魔がそれ相應やしろの社まつを建て、祀まつっていたのだが、死神がそれを世界中に散らばらせてしまつてな。今ではどこにあるのか分からん」

ティアは机のまわりをウロウロと歩きながら、顎に手をあてて話した。

「世界は広い。虱潰しみつぶししに探していたんじゃ、一生が終えてしまう。そうしたらいいものか……」

「私、お兄ちゃんが探してるのもかどうかわからないけど、それらしい物なら知ってるよ」

「ああ……そうだよな。探す方法なんて………つてマジで!？どこだ!？どこにある!？」

ティアは急に興奮し出し、ウルの肩を掴んで場所を尋ねた。

「う、うちの近くの小さな社があるんだけど、そこに、とても古い鏡が祀られているの」

「それだ……すぐその場所に案内してくれ!」

「あ、う、うん」

ティアとウルはその場所を目指し、人間界に降り立った。さつきまで2人がいた空間は、ティアが自分の魔力を使つて作ったティアだけの空間。つまり突然その場所にたどり着くのは、ティアが招いているからだ。それを興奮のしすぎでウルに説明する事を、ウルもまた、ティアがあまりに興奮しているものだから、聞くのを忘れてしまった。

人間界に降り立ったティアとウルは、ウルの家の近くにあるといふその小さな社に向かった。

「ここだよ。この社の中にあるはずだけど……」

ウルは社についている小さな扉を開いた。すると、中には予想通り鏡らしいものが入っていた。

「あつた！　これだよ！」

「どれどれ……お、確かに八咫鏡だ！　よくやったぞウルよ！　これで1つ目の神器……ゲットだぜ！」

何かどこかで聞いたことのある様な言い方をし、右手に持った八咫鏡を高々と、月や星たちが輝いている闇色の空へと持ち上げた。

「よかったねお兄ちゃん！　あれ？　何かついてるよ？」

「あ？」

鏡についていたそれを見ると、何やら数字が沢山書かれているA4サイズのコピー用紙を半分に切ったものだった。切り口が雑なので、おそらく手で破いたのだろう。

「……14・5・23・25・15・18・11に行け……？　これどついう事？」

「さあな。コピー用紙がまだ新しいから、おそらく最近貼られたものだろうが……子供のいたずらか、それとも、三種の神器の事を知っている何者かがやったのか……？」

ティアの眼つきが鋭くなる。

「気をつける。まだ用紙が温い。先程まで誰かが触れていた可能性がある。時刻は……深夜2時。子供が起きている時間じゃないな。やはり——死神か？」

ティアは左腕につけていた腕時計で今現在の時刻を確認する。

「ちよっとお兄ちゃん！　脅かさないでよ！」

死神という言葉に、ウルは怯え、ティアの腕にしがみついた。ティアも敵がいる事を警戒したのか、ウルを自分の身体へさらに密着させた。

「まずはこの暗号が何を示しているのか解かないとな」

ティアはコピー用紙とにらめっこを始めた。頭をフル回転させ、この数字が一体何を示しているのかを考える。ウルも少なからず書かれている数字に目を通し、答えを導き出そうとしているのだが、全く分からない。こういう謎々的なものは、ウルは得意ではないようだ。だからと言って、ティアが得意と言っわけではない。

すでに解き初めてから1分が経過していた。敵がすぐ近くにいるかもしれないという緊張感の中でこれを解くのは、かなり難しい事だろう。頭を謎々の方に集中させていると、後ろをとられていても気付かない恐れがある。

「……………そうか！ 分かったぞ！」

「え！ 分かったの！？ 何て意味なの！？」

ウルは謎々の答えをティアに求めた。

「つまり三種の神器の2つ目がある場所はあるのか……」

第2夜「三種の神器」(後書き)

誤字脱字があるかもしれません。

オリキャラはまだ募集していますが、1度投稿した人はなるべく投稿を避けてください。

第3夜「封印の社」（前書き）

今回はティアが戦うようです。

戦うといっても、戦闘が本格的にあるのは次回からですけど。

第3夜「封印の社」

三種の神器の1つ目・八咫鏡を手に入れたティアは、そこに貼られていた紙に書いてある謎々を解く事に成功した。

「ねえお兄ちゃん！ それで何て書いてあったの!？」

「まあ落ちつけ。オレの朝は1パックのプリンから始まる」

「え？」

ティアは突然にも、謎々とは全然関係のない話題を持ち出してきた。

「昼は2パック。夜は3パックのプリンを食べる……」

それからしばらく、ティアがプリンについて語り始めた。クリームをつけてサランボを頂上に乗せて食べれば、さらに美味だとかプリンの話しをしているかと思いきや、突然話題がチョコレートに変わったり、飴玉、かき氷に変わったりした。どれにも共通するものといえば、お菓子であり、甘いものである。

そう、つまりティアは甘い物が好きなのである。というより甘い物しか食べないといっても過言ではない。何故ここまで甘い物が好きなのかは不明だが、1つ分かっている事は、特に頭を使っているから糖分が必要だというわけではない。とにかく甘い物が好きだという事は分かっていたただけであろうか。

「……というわけで、つまりオレの晩飯はお菓子ではなくてはいけないわけであってだな……ん？ どうしたウルよ？」

「そ、そんなどうでもいい（……）事よりも早く答えを教えてくださいよ！」

くだらない話を黙って聞いているのは限界に達したようで、ウルがティアの耳元で近所迷惑にならないほどの声で叫んだ。

「ど、どうでもいいって…… まあ謎々は意外に簡単だった。答えは『ニューヨーク』だ」

「どうして『ニューヨーク』なの？」

「あの数字はアルファベットを表していたんだ。つまり1はA。2はB。3ならCってな」

「……なるほど！　そういう事だったのね！」

ウルもどという規則性だったのか理解できたようだ。流石は高校で学年上位に君臨し続けていただけの事はある。

どという事かと細かく解説すると、つまり14はN・5はE・23はW・25はY・15はO・18はR・そして11はK。これを左から並べると『NEW YORK』となる。答えはつまり『New York』ということになる。

こういった謎々は、数字の規則性さえ分かれば、簡単に解くことができるのだ。

「よし、じゃあ明日にでもすぐにニューヨークに出発だ」

「どうやって行くの？」

「飛行機でも船でも何でもいい。悪魔に人間の乗り物を使ってはいけないという規則はない。では逆に聞くが、お前はどやって行きたい？」

「えっと……乗ったことがないから、飛行機で連れてって欲しいなあ……なんて。てへっ、無理かな？」

ウルはちよつと可愛らしく首を傾げて下を少し出して甘えるようにしてお願いしてみた。

「可愛くないからやめろ」

しかし悪魔であるティアには通用しなかった。その一言で、ウルはムスツとして頬を膨らませた。

「じゃあ明日の11時の便（NH10）に乗るか。ウル、もうお前には行く場所も無いのだ、これからは兄妹仲良く一緒にあの館で暮そうな」

そう言つて、ティアは笑いながら小さい子の頭を撫でる様な感じで、ウルの頭を優しく撫でた。

「う、うん」

ウルは少し頬を赤く染めて、ティアの顔をしばらくジッと眺めて

いた。そのとき初めて、ティアが本当の自分の兄となってくれたのだと、確信した。

「待て」

あの空間に戻ろうとしたそのとき、空から何者かの声が聞こえた。空から聞こえたのだ。普通の人間ではないことは確かだった。

「誰だ？　今良い雰囲気なんだ。邪魔するな」

「やはりその程度の謎々ではあつさり解かれてしまうようだな」

電信柱から一回転しながら降りてきたのは、紺色のジーンズに白色のＴシャツの上に緑色のフード付きジャケットを着ている銀髪の男だった。

「デメエは……死神か？」

「今はそれだけ名乗っておこう。ラ・モール様のお言葉を伝えに来た」

「ラ・モールだと！？」

ティアは『ラ・モール』という名に反応する。

「貴様が三種の神器を簡単には手に入れないように、ラ・モール様は世界各地にばら撒き、１つ１つに次の神器の場所を示す謎々を用意した。三種の神器をすべて手に入れ、力を我がものとし、いつかラ・モール様の元へ行くんだな」

銀髪の男はそれだけ告げると、ティアに背を向け、暗闇へと歩き出した。

「ああ、それと、貴様の实力を知る為、三種の神器があるすべての場所に、幻獣を封印させてもらった。三種の神器を手に入れたければ、その幻獣を斃すがいい」

一旦止まり、ティアに背を向けたまま、銀髪の男は暗闇へと姿を消した。

「幻獣……だと？」

あの銀髪の男の言葉が本当なら、今この場所にも幻獣が封印されているはずだ。

「……………」

ティアはウルを後ろ避難させ、少しずつ鏡が祀られていた社から離れていく。そしてバルムンクを構え、戦闘の準備が整った次の瞬間、社がガタガタと揺れ始め、その下から社をバラバラに破壊して、3つの頭を持つ犬のような幻獣が姿を現した。

「ワフオオオオオオオン！！」

幻獣は遠吠えをした。

「こいつは地獄の番犬ケルベロス！」

ケルベロス は、ギリシア神話における冥界の番犬。ローマ神話ではケルベルス という。その名は「底無し穴の霊」を意味する。ヘーシオドスの『神統記』によれば、50の首と青銅の声を持つ怪物で、テューポーンとエキドナの息子とされている。

しかし、一般的には3つ首で、竜の尾と蛇の鬣たてがみを持つ巨大な犬や獅子の姿で描かれる。死者の魂が冥界にやってくる時には友好的だが、冥界から逃げ出そうとする亡者は捕らえて貪り食うという。これが地獄の番犬といわれる由来である。

また、この獣の唾液から猛毒植物であるトリカブトが発生したとされており、ヘーラクレースによつて地上に引きずり出された時、太陽の光に驚いて吠えた際に飛んだ唾液から生まれたといわれている。ハーデースの忠犬といわれる。また、2つ首の頭を持つオルトロスは、ケルベロスの弟にあたる。ソロモン72柱の魔神の1柱、ナベリウスと同一視されることもある。

3つの頭が交代で眠るが、音楽を聴くとすべての頭が眠ってしまう。ギリシア神話では、豎琴の名手オルペウスが死んだ恋人エウリュディケーを追つて冥界まで行く話があるが、そのときも豎琴で眠らされている。

また、甘いものが好きで蜂蜜と芥子けしの粉を練つて焼いた菓子を与えればそれを食べている間に目の前を通過することが出来る。アイネイアースを連れたクマイのシビュレーや、ペルセポネーに美を分けてもらいに行ったプシューケーはこの方法でケルベロスをやり過ご

した。その後この菓子はカローンへの渡し賃にもなっている。ただし、プシューケーがこの時カローンに渡したのはオボロス銅貨で、ケルベロスに食べさせたのは堅パンで、シビュレーが食べさせたのは睡眠薬入りの酒に浸したパンだともいわれる。そして、後にこのことから厄介な相手を懐柔する賄賂の意で「ケルベロスに与えるソップ」という言葉が生まれた。

ダンテの『神曲』『地獄篇』にも登場し、貪食者の地獄において罪人を引き裂いていた。

「とんでもない化け物と対決する事になったな。ウル、こいつはヤバイから、下がって……」

「グワアアア！」

「お兄ちゃん危ない！」

合図なくケルベロスはティアに襲い掛かる。

「ハアッ！」

ティアはウルを左腕で抱きかかえ、空中に飛び上がった。

「きゃっ！」

「大丈夫かウル？ 怪我は？」

地面に着地すると、ティアはすぐにウルの身体に傷がないか確認する。悪魔のくせに人間の兄らしい事をする。

「大丈夫よ。それより……」

「ああ」

ティアはゆっくり立ち上がり、バルムンクを構える。

「3話目にしてやっとオレの戦闘シーンだな。デビュー戦って事なら、さらにやる気が出る」

「ワウオオオオオオオン！！」

ケルベロスがティアの位置を確認し、再び襲い掛かってくる。

「させるか！」

今度は避けずに、バルムンクでケルベロスを斬り裂こうとしたが、相手もそう簡単には斃されてはくれない。頭の1つがバルムンクを銜え、ティアの動きを止めた。続けてその傲慢の爪でティアの腸に

攻撃を与えた。

「ぐわっ！」

思わず悲鳴を上げてしまう。しかし妹が見ている前なので、どんなことがあっても勝たなくてはならない。

「ちょ、調子に乗るなよワン公！」

力押しでバルムンクを銜えていたケルベロスの首の上半分を切り落とした。

「グワアアア！」

ケルベロスが怯んだ隙に、バルムンクを構え直し、こう言い放った。

「I will enjoy……（楽しもうぜ……）」

第3夜「封印の社」(後書き)

読んでくださりありがとうございます。

小説に関して評価してくれるとありがたいです。

第4夜「涙（ティア）」（前書き）

今回はケルベロスとティアの戦闘がメインです。
始めの敵なのでそこまで念入りはしていませんが。

第4夜「涙（ティア）」

睨み合うティアとケルベロス。それを遠くから眺めているウルは、あんな犬のお化けにティアは勝てるのかと不安な気持ちでいる。

「すう……はあっ！」

ティアはケルベロスの間を見つけ、斬りかかった。

「グワアア！」

「くっ！」

しかし右の爪で、弾き飛ばされてしまい、元の位置にまで戻った。そこからティアはケルベロスを囲むように横方向に走った。ティアを目で追っているケルベロスも、一緒になってクルクルとその場で回ったため、目が回ってしまったのか、若干足元がふらついている。

「今だ」

ケルベロスの体勢が不安定になったのを確認したティアは、ケルベロスの背後から斬りかかった。

「グワアアア！！」

見事ケルベロスの尻尾を斬り落とす事に成功した。しかしまだ喜んでばかりもいられない。尻尾を斬られた事で、ケルベロスは我を忘れるほどに怒り狂った。

「グワアアアアアア！！」

怒り狂ったケルベロスは、3つの口から唾液を大量に垂らしながらティアに突進してきた。

「はっ！」

ティアは華麗に宙を舞い、ケルベロスの攻撃を避け、後ろに回った。ただ勢いにまかせて突進してきたケルベロスは、民家の塀に激突し、塀は爆発でもしたかのような騒音をたて、崩れ落ちた。

「後で直しかねえとな……」
「たたく、余計な仕事増やしやがって」

ティアは勢いをつけてケルベロスに向かって走り、その途中で空中にジャンプし、一回転をして、バルムンクをケルベロスの背中を

突き刺した。

「グワアアアアア!!」

突き刺さったバルムンクは、腹まで到達し、さらに力を銜えて、貫通させた。

激しい痛みによってケルベロスは暴れ回り、何度も塀や民家の壁に激突している。ティアはその上で、暴れ牛を抑えるかのようにしてバルムンクを突き刺した状態で、自分も振り落とされないようにしてケルベロスの体力が無くなるときを待った。

「グアアアアアア……グアア……グアッ………」

次第にケルベロスは大人しくなり、そして最終的に力尽きて、その場に倒れこんだ。

「クウウン………」

まるで犬が飼い主に甘えるような悲しい声を出し、ケルベロスは静かに目を閉じた。

「はぁ……はぁ………」

ティアは戦闘で疲労が出たのか、息を荒くなった。そしてケルベロスの背中から降りると、今度は1番右にある頭の耳に、そっと顔を近づけると、ヒソヒソ話してもするかのように静かに、そして優しく囁いた。

「悪いな。お前に恨みはないが……その魔力、頂くぞ………」

そう言い終えると、ティアはケルベロスを優しく抱きかかえるようにして、ケルベロスのその大きな身体に身を寄せる。ケルベロスの身体とティアの身体が、まるで共鳴しているかのごとく、美しい青色の光に包まれた。

「……………」

少し離れた場所からその光景を見ていたウルは、感動して声も出なかった。

そしてしばらくすると、青い光は消え、ケルベロスの死骸もその青い光とともに消えてしまった。

「……お兄ちゃん、何をしたの?」

「……ケルベロスの魔力を頂いたのだ。魔力の量で、その者の強さが変わる。魔力は体力とは別に存在する。魔力の器は修業さえすればいくらでも大きくできる。まあ生まれつきで大きい者もいれば、小さい者もいる」

ティアは魔力について語っている間、1度もウル顔をしようとせず、ケルベロスが倒れていた場所をジッと見ながら語った。

どうしてかと気になったウルが、少しだけ見ようとして下から覗き込むと……。

「……！」

衝撃的だった。

どんなことがあっても涙を流さないようなこの冷酷な悪魔が、その青色の瞳と黄色の瞳から少量だが、涙を流している。その涙はダイヤのように輝いている。そして、そのときのティアの表情は、まるで遺族が亡くなったような悲しい表情をしていた。

（お兄ちゃん……）

ウルはそんなティアをますます尊敬し、好きになってしまった。

「……さあ、ウル。もう、帰ろう……」

「うん……」

ティアはいつまでも泣いているわけにもいかないの、無理矢理コートの袖で涙を拭きとって、ウルに無理矢理作った笑顔を見せながら、『帰ろう』の一言を言った。

ウルも涙の事は何も聞かなかった。そのまま、ティアの後ろをついて行くだけだった。

朝が来た。しかしティアの作りだした空間では24時間365日夜なので、朝が来たのかどうか、素人のウルには分からなかった。だから寝坊して怒られるのも嫌なので、時計を見て目覚ましを掛け、ティアよりも早く起きようとしていた。

「ガア……ガア……」

案の定ティアはまだ寝ている。

「お兄ちゃん凄い豪華なベッドで寝てるのね」

ティアは悪魔に相応しいような赤い高級感が溢れるベッドで寝ていた。しかもトランクス1枚で腹を掻きながら。まだ24歳なのだが、もうかなり中年に近い。これが昨日の夜泣いていた男と同一人物だとは思えない。

逆にウルは、隣の部屋で寝ていたのだ。その部屋は何故か和室だった。そして部屋には丸い机と押入れと布団があるだけだった。妹に対しての扱いが酷過ぎるのではないか。居候という立場のようなものなので、文句は言えないが、ティアの部屋のドアを閉めようとする直前で、ウルはティアに聞こえないようこう呟いた。

「バカ……」

「……………（ピク）」

そしてウルはゆっくりと扉を閉めた。

「さてと、お兄ちゃんが起きる前に朝ご飯作るのかな！」

と、スキップをしながら台所へと向かった。館の中は意外と広く、台所がどこにあるのかはすぐには分からなかったが、15分ほどウロウロしていたところ、やっとたどり着くことができた。

中は意外に普通だった。どこの料理店にもあるような感じの雰囲気を出しており、特別に不思議な点は見つからなかった。

「冷蔵庫……」

当たり前だが冷蔵庫くらいある。大きさは大・中・小と3つあった。どうせお菓子ばかり入っているのだろう、と思って小の冷蔵庫を見てみると、その中身は意外にも普通だった。

「家庭的な感じね」

野菜や卵、肉やその他いろいろ入っている。醤油やソースといった調味料もセットしてあった。が、冷蔵庫以外を探しても、お菓子らしきものは見当たらなかった。

「お兄ちゃん、お菓子好きとか自分で言ってたのに、お菓子がひと

つも置いてないのね」

そんな事を思いながら、ウルはフライパンを使って、卵焼きを作り始めた。

まず、ボウルに卵を割り入れて、よく溶きほぐし、出し汁、砂糖、塩を入れてさらによく混ぜる。次に卵焼き器を十分に熱し、サラダ油をなじませ、先程作ったものを少しずつ流し入れ、焼く。これを2本作った。そして、焼き上がれば巻きすで巻いて形を整えしばらくおき、適当な大きさに切った。

そんな感じで卵焼きは完成した。それから味噌汁、焼き魚などを作ったが、1番の主役のような存在であるお米がない。米はあるが炊いてなかった。仕方がないので、お米なしの朝食になったが、まあ炊いていなかったティアが悪いことにした。

「さて、お兄ちゃん起こしに行こうかな」

薄い桃色のエプロンを揺らしながら、駆け足でウルはティアの寝室まで行った。

「お兄ちゃん、朝食できたよ」

と、扉を開けると、ティアはまだ寝ていた。

「お兄ちゃん起きて、朝食一緒に食べようよ」

そうやって優しく身体を揺するのだが、起きる気配が全くない。

「……………ウル……………」

と、寝言を言っただけで起きる気配はない。

ウルは叩き起こすわけにもいかなないので、しばらくティアの寝言を黙って聞いている事にした。すると……………。

「……………ウル……………ウル！」

次第に魔されているかのようにハッキリと口で言いながら、突然起き上がった。

「おっ、お兄ちゃん！ 大丈夫！？」

「え……………あ、ああ……………悪い。それより、どうした？」

まるで悪夢にうなされていたかのように、額には汗が滲み出ており、髪は汗で湿っていた。

「ちょ、朝食できたから、呼びに来たの」

「そうか。すぐに行くから、先に食べていてくれ」

ティアは俯いたまま頭を押え、ウル顔は見ずにそう言った。

「う、うん。お兄ちゃんも、早く来てね」

ティアの様子が変わると、ウルは気づいてはいたが、ティアの身体が震えている様子を見ると、しばらく1人にしておいた方がいいと考えた。

（また……この夢か……クソツタレ………）

第4夜「涙（ティア）」（後書き）

この小説を評価してください。誤字脱字がありましたら、お教えください。

オリキャラについては、まだ募集していますが、1人につき、1人だけにしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6238y/>

悪魔の妹ウル

2011年11月30日13時45分発行